宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第 35 回
第７章　天沢退二郎先生
その３　『光車よ、まわれ！』とオレンジ党（上）

1982（昭和 57）年２月 13 日の夕刻、パリ 10 区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内された。ひとりは、天沢退二郎先生（1936～2023 年）だった。

始源としての雨

雨が物語の始源である。天沢退二郎は、『宮沢賢治の彼方へ』（思潮社 1968 年）の「序論」にこう書きつけている。

> 雨は沈黙自身の発する言葉がいちめんに降りおちてくるものの謂だ。だが雨は詩の言葉ではなくて、作品そのものではないか。ぼくたちがとどめ定着するひまもあらばこそ、あたら開口し啓示する機会を失って次から次へ地にこぼれしみていく果実たち。作品は、雨のように降ってくる果実ではないか。（引用は増補改訂版 1977 年による）

天沢は、賢治の童話「風の又三郎」の「九月八日」の章の「すると誰ともなく／「雨はざっこざっこ雨三郎／風はどっこどっこ又三郎」と叫んだものがありました。」というくだりや、長編詩「小岩井農場」の「雨だ。たしかだ。やっぱりさうだ。／降り出したんだ。引っ返さう。」という部分に注目する。そして、天沢は、雨を「小岩井農場」の「彷徨する詩人を意識の下部から」つきうごかす「オブセッション」（強迫観念）とする。

雨が物語の始源である。長編『光車よ、まわれ！』（筑摩書房 1973 年）も、雨に呼び出された物語だった。その書き出しはこうだ。

> さっきから、まるで校舎をたてにゆさぶるばかりに雨がふっている。風もでてきたらしく、校庭のへりの、せの高い楊の木が、重たげなみどりの髪をゆさゆさ大きく乱している。
>
> はげしい雨と風の音のために、教室の中はかえって、ひっそり静かな感じがした。机やゆかはぬれたようにひんやりつめたくて、先生の声をどんどんすいとってしまう。一郎はそのふしぎな静けさに、すこし眠いような、からだががらんどうになったような、へんな気持ちになりかけていた。
>
> だから、いきなり教室のうしろのドアがガタガタッとあいて、あいつらがすがたをあらわしたとき、一郎はおどろいて、思わず立ち上がったまま、心臓がとまったような気がしたのだ。（中略）
>
> ドアをあけてそこに立っていたのは、まっ黒なぬるぬるしたものに身をくるみ、やはりまっ黒な頭巾をかぶった、異様に顔のながい、目の大きな、ばけものとしかいいようのない三人の大男だった。そいつらのからだはうしろの入り口いっぱいにあふれるばかりにせりだして、教室中をおしつぶしそうだった。（傍点原文）

だが、塚田先生の声が「石が川面をやぶるように、とまった時間をうちくだいた。」

ドアのところには、おなじクラスの宮本と武田と斎藤の三人が、ずぶぬれの黒いレインコートからポタポタしずくをたらし、髪の毛もびっしょり水びたしのまま、寒そうにぶるぶるふるえながら立っていたのだ。べつにどこといってばけものじみたところもない、いつもの三人ではないか。（傍点原文）

「始源としての雨」の見出しで書いてきた、これは、実は、中村三春編『ひつじアンソロジー　小説編Ⅰ』（ひつじ書房 1995 年）の巻末に「天沢退二郎解説」として、私が書いた文章の同じ見出しの部分を一部省略して繰り返したものだ。このアンソロジーには、天沢退二郎の短編三つ「赤い凧」「ちいさな魔女」「秋祭り」が再録されている。いずれも、天沢の短編集『闇のなかのオレンジ』(筑摩書房 1976 年)に、巻頭から、この順番でのっているものだ。

「始源としての雨」のつぎに「物語の骨格」の見出しで書いた文章のはじめのほうも繰り返す。

物語の骨格

『光車よ、まわれ！』は、いつものクラスメートが「ばけもの」に見えるというような、めまいする瞬間を数多くはらみながら進行する、魅惑的なファンタジーだ。しかし、物語は、意外にはっきりした骨格をもっているのではないか。第一章「怪異（あやかし）のはじまり」で、「《水の悪魔》の正体に気づきだしたあたしたちは、じぶんをまもるためにも、たたかわなくちゃならないの。」というのは戸ノ本龍子である。「水の悪魔」とのたたかいに勝つために、彼女たちは、ふしぎな力をもつ「光車」（という一種の「聖杯」）を三つ、さがし出さなければならない。『光車よ、まわれ！』は、少年少女たちが、地下からあふれてくる邪悪な水から世界をまもろうとする物語として読むことができる。物語の構図を「善悪二元論」としたのは、作者自身だ。そして、その「善」も「悪」も、龍子の祖父のなかにあったものなのだ。初版の「作者おぼえがき」には、こうある。

この物語は、一応、いわゆる本格ファンタジーをめざすものとして、善悪二元論を足場にしようとしている。しかし、じつは、この二元論はもうなりたたない。この物語においても、そのような足場自体が、あきらかにくずれてゆくさまをごらんいただきたい。

「善悪二元論」のくずれ、とは、物語の後半に、吉川トオルらの「土曜勉強会」という、もう一つの勢力がまぎれこんできて、龍子たちから光車をうばおうとする、そのことを指しているのだろうか。

先に記したように、これらの文章は、1995（平成７）年に刊行された『ひつじアンソロジー　小説編Ⅰ』に解説として掲載されたものだ。ここで繰り返したことに関しては、以前に井上乃武さんからの批判がある（井上「架空児童文学論のための断章――那須正幹『屋根裏の遠い旅』論」『論樹』2004 年 12 月）。井上さんは、私の那須正幹論（「那須正幹と佐々木禎子――「生きられなかった可能性」をめぐっ

て――」、石井直人・宮川健郎編『ズッコケ三人組の大研究Ⅱ』ポプラ社 2000 年所収）のもつ問題点を指摘した上で、さらに述べる。

> このような宮川の態度の曖昧さは、別にこの論文に限ったことではなく、彼の評論全体に一貫する特徴だといっていい。例えば彼は、天沢退二郎『光車よ、まわれ！』（中略）について、「「善悪二元論」のくずれ、とは、物語の後半に、吉川トオルらの「土曜勉強会」という、もう一つの勢力がまぎれこんできて、龍子たちから光車をうばおうとする、そのことを指しているのだろうか。」と述べるが、ここでも、「「善悪二元論」のくずれ」という意義深い主張（となるはずだった言説）が、「…だろうか。」という疑問形によって弱められ、骨抜きにされ、単なる問題提起へと切り下げられてしまっている。（カッコ内原文）

井上さんの批判はまだつづくのだが、今回、『光車よ、まわれ！』を読み直すにあたって考えたのは、「「善悪二元論」のくずれ」という問題にもっと踏み込んでいけるかどうかということだった。

『光車よ、まわれ！』を読み直す

『光車よ、まわれ！』を読むのは何回めだろうか。（注１）それでも、今回も、新しい気もちでテクストにむかった。

「水の悪魔」に打ち勝つために「光車」三つをさがし出す物語は、フランス文学者としての天沢先生の専門である中世の聖杯物語が下じきになっているのだろう。（注２）騎士たちが、キリストが最後の晩餐のときに用いた聖なる杯を探索する。『光車』の第二章「《光車》をさがせ」で一郎が「さてと、さっそく出かけよう。まるで聖杯をさがすアーサー王の騎士みたいだよね。」といったり、第八章「ふたりの祖父」で龍子の祖父が「そうか。よしよし、みんなりはうそうな騎士ぶりじゃ。」（傍点原文）と龍子の仲間たちをむかえたりする。

いつものものが急に何か別のものに見えるのは、物語の冒頭、雨の日に遅刻して登校した、クラスの宮本たちにかぎらない。『光車よ、まわれ！』は、おもに川岡一郎の視点で語られ、吉川ルミの視点の章がはさみこまれるけれども、魅力的なヒロインが「光車」を探索するグループのリーダー、戸ノ本龍子である。第二章「《光車》をさがせ」で、一郎が「でもさ、いったい、《光車》ってなんなのさ。ちっともわからない。」というと……。

> すると龍子が、ふしぎなわらい方をして、すっと立ちあがった。黒っぽいスカートがひらいて、うすぐらい部屋の中にまるで黒い鳥が立ちあがったように見えた。
>
> 「そうね。“百聞は一見にしかず”って、むかしの人もいってるわ。今夜、みんなで見にいきましょう。」

龍子に「黒い鳥」が重ねられる。その後はもう「黒い鳥」は語られないが、「龍子が、サッと長い髪をふって立ちあがった。」（第七章「誕生会・第二の《光車》」）というように龍子が立ちあがると、私たちのなかには「黒い鳥」も立ちあらわれるのだ。

龍子や一郎のグループのひとり、坂本左千夫は、「サッちゃん」と呼ばれる。

ちょうどそのとき、明り窓から下を見ていた一郎は、サッちゃんが、名まえどおりにサッと門をかけこんでくるのを見た。（第四章「第一の《光車》」）

まもなく、ようすを見に行ったサッちゃんが、すこし身をかがめて、のばした両手をななめうしろへつきだし、鳥がつばさをとめて空を切るときのように、ササササーッと走ってもどってきた。（第七章「誕生会・第二の《光車》」）

走りもどってくるサッちゃんもまた、鳥に見える。『光車よ、まわれ！』を再読する時間のなかで、私は、「善悪二元論」や「善悪二元論」のくずれのことは忘れて、いつものものが別のものに見える、めまいするような瞬間を何より楽しんだ。これは、転校生の「高田三郎」が風の神に見える瞬間が折々にあらわれる、宮沢賢治の「風の又三郎」を連想させる。（『光車』の一郎も、「風の又三郎」の一郎をずっと思い出させつづける。）（注３）

「風の又三郎」については、何度か書いたことがあるが、つぎは、『物語もっと深読み教室』（岩波ジュニア新書 2013 年）の一節。（注４）

いったい、転校生は、だれなのか。嘉助は、「風の又三郎」という風の神だと考えています。一郎は、先生のいうとおり、「高田三郎」という現実の子どもだと考えようとしています。私たち読者も、嘉助の立場になって読めば、「風の又三郎」に見えてくるし、一郎の立場で読めば、「高田三郎」に思えます。嘉助の立場で読めば、風の神の登場する、ふしぎな世界が描かれている空想物語ということになるし、一郎の立場で読めば、谷川の岸の小さな学校を舞台とする、ふつうの世界が描かれている日常物語ということになるでしょう。

「風の又三郎」は、一つの物語なのに、二つの物語として読めるのです。だから、私は、「風の又三郎」は、「二重の風景」を生み出す装置だといったことがあります。宮沢賢治は、詩人でもありますが、「二重の風景」というのは、その詩「春と修羅」にあることばです。「春と修羅」のなかに、「すべて二重の風景を／喪神の森の梢から／ひらめいてとびたつからす」というところがあります。「風の又三郎」における「二重の風景」とは、作品のなかに、ふしぎな世界とふつうの世界が打ちかさなっているということですね。

井上乃武さん

井上乃武さんは、先の論考とは別の「ファンタジーは現実の道具じゃない――天澤退二郎『光車よ、まわれ！』論」（『論樹』2002 年 12 月）で、「善悪二元論」や「善悪二元論」のくずれについて考察している。

「（作者―宮川注）おぼえがき」の表現は、たとえ天澤自身がそれを認めるかのような発言をしているにせよ、この作品が終始一貫して「善悪二元論」の枠組みから出ていないことを保証するものではない。逆に、物語の進展につれてこの作品が「善悪二元論」のくびきから解放されていく可能性こそがこの『光車よ、まわれ！』論の先にあるべきものではないだろうか。

井上は、作品に登場する三つのファンタジー世界(「さかさまの国」「ウラガリ国」物語、「大天井」)の構造をつぶさに検討した結果、「『光車よ、まわれ！』は、決して「善悪二元論」に基づいた作品ではないことが分かる。」とする。

そもそも、「善悪二元論」が成立するためには、「善」と「悪」、「現実」と「ファンタジー」が、対立的、言いかえるなら対等な関係を持つことが必要である。にもかかわらず、この物語のエンディングにおいて、ファンタジーは、現実のことなどお構いなしに、水の下へと消えていってしまう。

先に述べた、「二重の風景」を生成する装置としての「風の又三郎」、作中で、ふしぎな世界（ファンタジー）とふつうの世界（現実）が打ちかさなっているものとしての「風の又三郎」をモデルとして『光車よ、まわれ！』を読み直すことができるならば、ようやく井上論に対する理解がひらかれるということになるだろうか。このあたりのことは、次回以降も考えていくことにする。

「風の又三郎」では、嘉助が「あいづやっぱり風の神だぞ。風の神の子っ子だぞ。」というのに対して、一郎が「そだないよ。」と高くいう（「九月四日　日曜」）。転校生をめぐって、嘉助と一郎は対立しているが、転校生が別れも告げずにいなくなってしまったあと、雨の日の朝の教室で、ふたりは、「しばらくだまったまま相手がほんとうにどう思っているか探るように顔を見合せたまま立」つ(「九月十二日　第十二日」)。作品は、ふしぎな世界（ファンタジー）とふつうの世界（現実）のどちらが優位なのかを明らかにしないから、二つの世界は、対立するのではなく、打ちかさなっているのだ。（注５）

「原風景」の考古学

アンソロジー巻末の「天沢退二郎解説」以前にも、『光車よ、まわれ！』について書いたことがある。1983（昭和 58）年６月の『日本児童文学』だ。特集「ファンタジーと現代」に寄稿した「現代日本のファンタジー―あるいは、「原風景」の考古学について―」である。特集のはじめの本田和子「現代の不安とファンタジー―作品からの照射―」でも、『光車』が論じられている。

私は、乙骨淑子『ピラミッド帽子よ、さようなら』（理論社 1981 年）、いぬいとみこ『みどりの川のぎんしょきしき』（実業之日本社 1968 年）、大石真『街の赤ずきんたち』（講談社 1977 年）などを取り上げ、それらが地下世界に押し込められた「原風景」を堀り出す想像力によって現実を相対化するファンタジーになっていることを書いた。しめくくりでは、天沢退二郎のファンタジーにもふれている。

道の下から邪悪な水があふれてくる『光車よ、まわれ！』（中略）では、戸ノ本龍子が〈《水の悪魔》の正体に気づきだしたあたしたちは、じぶんをまもるためにも、たたかわなくちゃならないの。〉というが、天沢のファンタジーは、地下の魔ものから地上の秩序をまもる冒険活劇として読める。それは、〈善悪二元論〉(中略)を足場とする物語である。そして、そのことは、いささか古風な気もする。

読み返すと、作者の「善悪二元論」ということばに素直に引き寄せられていた時

期の文章だとわかる。

いつだったか、記録がうまく引き出せないのだけれど、この文章を発表して間もなくだったと思う。東京のいくつかの大学の児童文学サークルが共同で主催した講演会の講師が天沢先生で、聞きに行ったことがあった。(会場は昭和女子大学だったような気がするが、はっきりしない。)講演のおしまいのほうで、上記の私の『光車よ、まわれ！』に対する評価に不満をもらされた。これは、聞いただけで帰るわけにはいかないと思った。講演終了後すぐに演壇に近づきながら、1982 年2月のパリでのことが頭をよぎったけれど、このときも、ただ名のって、おじぎをしただけだった。(つづく)

(注)

1、ピュアフル文庫版(ジャイブ 2008 年)で読み直した。初版のあとにも、いくつかの版があるが、作者は、「これをもって、底本とする。」としている(「ピュアフル文庫版あとがき」)。今回の引用も、同書による。

2、天沢退二郎『エッセー・オリニック』(思潮社 1987 年)の第一部「アーサー王物語群――《夢を誰が語りうるか》」で研究の一端を知ることができる。

3、『光車よ、まわれ！』の冒頭の教室の場面で行われているのが塚田先生の理科の授業であることからは、もちろん、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の「一、午后の授業」を思い出す。塚田先生は人体(脳)の授業、「銀河鉄道の夜」は天体(銀河)の授業だが。

4、さらにくわしくは、宮川健郎『宮沢賢治、めまいの練習帳』(久山社 1995 年)を参照のこと。

5、「風の又三郎」の引用は、宮川健郎編集『名作童話 宮沢賢治 20 選』(春陽堂書店 2008 年)による。